

▲ 第四回特別企画展

「与謝野寛・晶子展—恋ひ恋ふ君と—」

4月19日(土)～6月8日(日)



+++++
高橋睦郎氏 講演会
「新しい詩歌の母神 晶子」
4月20日(日)

本展を記念して、北九州市出身の詩人高橋睦郎氏にご講演いただきました。与謝野晶子が近代詩歌に与えた影響について、詩や短歌の朗読を交えながらお話しいただきました。

ゲートが「永遠に女性なるもの我らを導く」と言っています。

展示資料約一八〇点
入場者数二二六一人
(イベント含む)

本年、生誕二三〇周年を迎えた歌人・与謝野晶子と、その夫寛(鉄幹)の生涯と業績を展望する展覧会を開催しました。「第一部 近代詩歌の扉を開く」「明星」「スバル」の時代」「第二部 自立する女性へのまなざし」「女性の地位向上へ」「第三部 九州での足跡」とし、特に第三部では地元の方々のご協力により、夫妻が九州に残した書や書簡などが揃い、充実した展示になりました。

我ら男性というものは常に女性なるものに導かれて成長するのだと解釈すればいいでしょうか。詩人や芸術家の場合、特に女性の強い影響があります。そういう女性たちの大元にいるのが与謝野晶子で、ほかに比べようもない大きな存在ですね。私が晶子を認めるようになったのはごく最近で、むしろ寛の方を評価していました。「誠之助の死」という詩は、晶子の「君死にたまふことなかれ」よりも詩的結晶度が高いとかつて書きました。しかし今は、この作品は「君死にたまふことなかれ」がなければ生まれなかったと考えています。

+++++
晶子の人生を年譜に沿って見ていきますと、まず明治十一年に堺に生まれます。実家の菓子商駿河屋は相当大きな家でした。明治二十二年、お姉さんが結婚すると、晶子が代わりに店の帳場に出て切り盛りしていました。明治三十三年、寛が「明星」を創刊し、晶子も入社。その年の八月に寛が来阪し、山川登美子とともに初めて会っています。翌年、「みだれ髪」を鳳晶子の名

で新詩社から刊行し、秋に結婚。明治三十七年に「君死にたまふことなかれ」を「明星」に発表。大町桂月が危険思想であるとして批判します。明治四十一年に「明星」が百号で終刊。このあたりから家計は全て彼女一人が支えていくこととなります。明治四十四年に寛がパリに向け出発。その費用二千元は晶子が調達しました。翌年五月に晶子は寛を追ってパリに向かい、その年のうちに単身帰国。明治四十四年に平塚らいてうが「青鞥」を創刊すると、女権運動に積極的に参加します。大正十年、西村伊

読。筆一本で家族を支え、原稿の焼失後源氏物語の訳を全てやり直しています。二つ目は、決断が早いという事。寛と出会って一年で家を捨てています。また寛を追ってパリに旅立っています。三つ目は、人に優しいが信念は曲げないという事。らいてうとの「母性保護論争」では、考えの違う事ははっきり述べています。四つ目は、生き方が首尾一貫しているという事。寛を一生支え続けた事からもわかります。とはいえ、この夫婦に波乱が全くなかったわけではなく、四女の宇智子さんの観察したと

大正十二年の関東大震災により、学院に預けていた源氏物語の現代語訳稿数千枚を焼失。昭和十年に寛が亡くなり、晶子自身は昭和十七年に亡くなりました。

晶子の生涯に対する僕の感想は四つあります。

一つは、逆境にあっても

辛抱強い事。例えば幼い

頃は働きながら古典を耽

りました。

